

---

# 召還者の異世界奮闘日記

銀野 臨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召還者の異世界奮闘日記

### 【Zコード】

Z8852Y

### 【作者名】

銀野 臨

### 【あらすじ】

家でテレビを見つづくついでいたら、きなり異世界にトランプした翔子

なんやかんやで1年たちこっちの世界にも慣れてきて元の世界に帰る方法を探しつつ平穏な生活を送っていた。しかしある1人の訪問者によつて平和な生活に崩壊の兆しが・・・?

## プロローグ（前書き）

文才もないのに勢いで書き始めた小説です  
ご都合主義で強引で展開が急ではやいかもです  
お世汚しにしかならないと思うんですが読んでくださったなら幸いで  
す！

## プロローグ

タイムマシンがあつたらいつに戻りたい？

小学生だった頃友達にそんなような質問をされた記憶がある

あの頃の幼かつた私はなんて答えたのかは思い出せない

「えいと漢字テストの前がいいな～えへへ」というようなことを言つていただろう

もしも、いや今そんな質問をするような人は私の周りにはいないが  
もしも、私が今その質問を投げかけられたら全力でそりゃもう全力  
で答えるだろう

1年前のあの日に戻せと

この世界にトリップしてしまった日に戻せと

私は大声で叫ぶ

こんなにヒックリマークつけてしまふのなんぞこの時間以外はないよなーというどうでもいいことを頭の片隅で考えつつ次のメニューに取り掛かる。

JRはアナツト食堂。

小さな町へエーリンの隣にある小さな食堂た

なると紹人目的な心しさはない

だって大脤わいなのに店員が私を含めて4人しかいないのだ。  
今でさえ殺人的に忙しいのに私が拾つてもらう前は3人で切り盛り  
していたというのだからその忙しさを考えると鳥肌が立つ。

1年前、私はこの世界にやつてきた。

の口から「おじいちゃん」と呼んでいたのだ。

訳あって高校生なのに一人暮らしをしていた私はそろそろご飯を作らうかなーなんて考えながらだらだらとテレビを見ていた。

つたのだ。

普通異世界トリップする時つて神様が現れて、みたいなくだりがありそだがそんなもん無いきなりトリップである。要するに説明

ゼロである。

しかもトリップした時間が最高に空氣読めていなかつた。

場所はアネットさんの家。そこはいいと思う。人の家だしよく小説に出てくる森とかじやないし。

しかし！タイミングが悪かったのだ。その日はアネットさんの娘さんのお葬式の日だつた。しかも弔いの儀といつ家族以外は絶対に立ち入つてはならない儀式の最中に。

空氣を読めないにもほどがあると思ひ。

幸いといつていいのかはわからないがその時そこにいたのは娘さんの家族であるアネットさんとアネットさんの一人目の息子のドミニクさん、二人目の息子のアドルフくんしかいなかつた。

その3人が本当にびっくりした顔をしていたのを覚えている。なんでも弔いの儀は家族以外は入れないよう結界を張るらしい。なのに私が入ってきたからとんでもなく驚いたと後口言つていた。

まあ私もそれに負けないくらいびっくりしてたけどね！

でも驚きすぎた人間は逆に冷静になるようだ。

私はその例に漏れずものすごく落ち着いていた。普段でもこんなに落ち着いてねーよつてくらい落ち着いていたのだ。なので周りを觀察する余裕が生まれた。

そして余裕が生まれてしまつた結果ある考えに至つてしまつた。

これは私が好きな小説のジャンルのアレとまったく同じじゃないか？あの違う世界にレッジゴー！あのジャンル・・・

い、いやいやアレは小説の中だけだって！ありえないありえないいやでも固まってる人たち田の色と髪の色がありえないくらいカラフルだし家の作りも日本と違う。さらに決定的なのはランプらしきものが浮いていたのだ。空中に、フワーッとワイヤーも無く・・・

そこまで考えて背中に汗がつたったのを今でも鮮明に覚えている。そして私は震えながら質問した。

「 ジャンゼルですか？」

記憶喪失者かつ！つてツツコミが現実逃避のように脳内でとんだ。

私の「『いはべ』」発言でアネットさん達3人は我に返つたようだつた。

固まり状態からの復活である。そこまではいいんだけどその後の行動が問題だった。なんとまあ我に返つたドミニクさんがナイフらしきものを懐から出したんだよね。

あはは・・・やっぱり普通に懐に刃物入ってる時点で日本じゃないよなあ銃刀法違反してるくらい刃渡り長いし。

私がこんなくだらないことを考えている間にドミニクさんは私のすぐそばまで来ていて刃先を私の首元に向けていました。なんてすばやい行動。

「手、挙げる。余計なことはするなよ? 血は見たくないからな。」

もちろんソックロー挙げますよ手。だって怖いからね刃物。平凡な女子高生は刃物向けられたら言いなりになっちゃいますよ。つか物騒なセリフだなオイ。

そんなこと現実逃避じみたことを考えている私をよそにドミニクさんはおとなしく手を挙げた私を縛りつと棚から繩を取り出していました。

しかも結構太めの繩です。紐とは間違つても呼べないくらい太い。縛られたら絶対痛いです。M気質の人以外は絶対無理ですアレ。ちなみに私はどちらかといえばうつん要らない情報ですね。そう、これも現実逃避です。

つてまた変なこと考えている間に田の前に繩がつ! つか私つてさつきから変なことしか考えてないな!! しそうがないかこの状況が変だもんね!!!

あーでもやつぱり嫌だよこんな。大人しくしてたほうが良いだろ  
うけどやつぱ嫌だ。私悪いことしてないのに何で縛られなきゃいけ  
ない訳か…そんな趣味は無いんだよ…

・・・あ、泣けてきた。急に泣けてきたよ私。さっきまで落ち着いてたのにね。グスッ。感情の起伏が激しいんだよね女子高生は。う一人前で泣くなんて屈辱。我慢せねば・・・グスッ。

つて泣いても無視かよ…この男は…か弱い？女が泣いてるのにシカトだよシカト。なんて冷徹なんだ。この悪魔、人でなし、鬼畜やローがあああああ…！

逃げたい。けどもう遅い。縄は私の手首に巻きつけられている。  
そして縄が縛られる瞬間

「やめなドミニク。今すぐナイフを置いて縄もしまいなさい。」

凛とした声が響いた。

そのときの私は涙で視界が潤んでいたドミニクさんを内心のしる事と逃げる方法を考えることに必死だったの一瞬誰が言ったのかわからなかつた。というよりここにいる誰かが私をかばうなんて思つてなかつたので空耳かと思つてしまつたのだ。

「でも母さん！結界を張つてるのに中に入つてくるなんてありえないだろ！？そんな怪しいやつを捕らえないと」

しかし田の前の男が反論しているから空耳ではない様子。まじか。かばってくれる人がいたのか。この声からして1人いた女人の人だな。

「いいからしまいなさい。そんな小さな女の子泣かせて・・・。いい年した大人が何やつてるの。」

女人人が言う。ああ、なんていい人なんだろう。でも小さな女の子つて私一応17歳だけど。まだ小さいのか？

「泣いてるのも油断させる作戦かもだろ！？それに見た田も魔法で変えてるのもだし！」

鬼畜男（いま命名）も言い返す。確かに「もつともですけどそんなことはありません。」

「うるさいよ！もう20年近く食堂やつてきた私をなめんじゃないよー悪いやつがどうか見極める田ぐらい持つてるわー！それとも母さんを信じられないのー？」

とうとう女人人が叫ぶと鬼畜男が黙り込んだ。どうやら女人の人の勝利のようである。

言い終えた女人人は私のそばにやつてきて微笑みながら言った。

「悪かったね、怖い思いさせて。もう大丈夫だから安心なさい。」

私はさつきまで恥ずかしいとか考えていたくせにその言葉と微笑みに思いつきり泣いてしまった。



「せ、これ飲みな。体が温まるから。」

「ありがとうございます。」

かばつて貰つて大泣きした私はその後口アラしき飲み物を飲んでました。

なぜ「らしき」がつくのかとこつと見た田も香つも口アなの味が「一ヒー」という摩訶不思議な飲み物だつたからです。絶対甘いと思つてたのに…苦かつたよ「ノヤロー

「それであんたはどうからでいつかに来たんだい？」

わざアネットと名乗つた女性が聞いてくる。

い、いきなり答えにくい質問を…

まあそこは氣になるよね普通。やつぱ正直に答えるしかないよなー  
私嘘下手だし。へんに嘘ついても余計に疑われるだけかもだし。

「私は日本という国から来ました。何故ここに来たのかはわかりません。家にいたら急にここに来てきました。」

正直に答えてみた。そして思ひ。

これ自分でたら警察に突き出されわーと。。。怪しこじこじの上ないよ！

「二ホンヘビーダイソーカ？初めて聞いたよそんな国知。」

やつぱり聞いたこと無いんですね・・・。懐からナイフ（刃渡りが長いやつ）が出た時やココアらしきものが出た時点で確信してたけどさう実際にいわれるときついモノですね。

ああ・・・トリップ小説読むのは好きだつたけどな。体験はしたくないよ。

「あの・・・ここはなんていう国ですか？教えてください。」

99・99999%確信しても一応確かめちゃうのが人間です。ここでドイツだよとかイギリスさ！とか言われたら泣いて喜ぶ。いやそれでも十分おかしいけど。自宅から外国もおかしいけどね。

「ここはフェルバンティエって国だよ。この大陸一大きな国さ。」

さて、結論。

ここは異世界です。

だって私はいたって普通の高校生だつたから大陸で一番大きな国の名前くらいは知っている。でもフェルバンティエなんて国名聞いたことが無い。

「フェルバンティエ・・・。そうですか・・・。すみません私いまから突拍子も無いこと言いますが良いですか？」

さて現実を受け止めたら（まだあんまり受け止め切れてないけどね）この世界での協力者を得なければ・・・とゆ一ことで異世界からきたってことを話してみようと思う。だって私が知っている人はここではこの人たちしかいないだろつか。さっきも言つたとおり私は嘘が下手だから本当のこと言つしかないしね。私一回認めちゃえば

結構順応早いんです。それに割り切ることは得意だしね。

話すと決めたけど一応話す前に許可を取つてみた。拒否されたら終わりだけど。

「何を言つつもりだ？」

鬼畜男さんが睨み付けながら聞いてくる。

あ、さっきから全然触れてなかつたけどこの人ずっとといましたよ。んでずっと私を睨んでました。親の仇つてぐらい鋭く睨まれてました。でも触れても気分が悪くなるだけだから無視してました。このこと考えるとアネットさんと話すほうが有意義だしね！

あともう一人の男の子もずっといます。この子はさっきから私をガン見してる。穴が開くんじゃないかってくらい見てます。そして一言も発さない。謎な子だ・・・。

「いや、だから突拍子も無いことです。たぶん信じてもうえそうに無いから先に確認をとつてみたんですけど・・・。」

言つてもいいか聞いたのに内容を聞かれては確認の意味が無いではないか！

「話してみなさい。ちゃんと聞くから。」

アネットさん！あなたマジで女神です！！ああ・・・アネットさんがいなきときにトリップしなくてよかつた。そしたら普通に縄で縛られ「ースだつたもんね。本当に感謝です。

「えと・・・じゃあ話をさせてもらいます。どうやら私の世界とは

違つ世界から来たみたいなんです。」

意を決して私がそういうと

3人はびっくりした顔をして再び固った。

## 序章4

「・・・はあ？違つ世界だと？何を言つてゐるんだお前は。頭おかしいのか？」

復活を果たした鬼畜男の第一声がこれ。頭おかしいだとー？自分でもやう思うわつ

「私だつてそう思ひますよ。でも他に説明がつかないんですよ。私の住んでいたところにはフェルバンティ工なんて国無いですし魔法も使えません。この飲み物も飲んだこと無いです。はじめて見ました。」

「そんな理由で信じられると思ひつか？」

「思いません。でもこれが事実なんです。あなたたちも日本なんて知らなかつたでしょ？でも私はそこで生まれ育つたんです！これは何があつても変わりません！」

感情が高まつて思わず大声を出してしまつた。やつぱり女子高生は感情の起伏が激しいようです。いかんいかん。

「異世界？本当に？」

突然聞いたことの無い声が響く。  
びっくりしてそっちを見るとさつきまで黙秘を貫いていた少年が口を開いていた。

「本当に異世界からきたの？ねえ本当に？嘘ついてないよね？違う世界から来たの？ねえどうなの？異世界からきたの？」

「う、うん。嘘ついてないよ。違う世界から来たよ。」

いきなり饒舌に喋りだした少年にビクビクしつづく少女は

「じゃあちよっと待つてーすぐ戻るから。」

といつて部屋の奥に走って消えていった。

残された私たち三人は呆気にとられていると直哉がおりすぐ戻ってきた少年が一冊の本を手にしていた。

「そもそものすゞい勢いでその本を差し出して

「異世界からきたならこれ読める？」

と言った。

「アドルフ、それお前がめちゃめちゃ大事にしてた本だろ？そんな怪しいやつに見せて良いのか！？」こつが言つてること嘘かもだぞ。

」

「うん。学校の先生にもらつた大切な本だよ。いま僕は異空間の研究をしていて先生にそのことについて相談したんだ。そのときこの本をもらつた。異世界から来た人が書いたものらしいけど文字がここで使われてるものと違つて読めないんだ。しかも不規則すぎて解説もできない。だから僕は異世界からきたっていう人がいるなら読んでもらいたい。」

アドルフくんが話す。

が、そのときの私はセリフの後半を聞いてなかつた。だつて異世界の人気が書いた本だと！？完全に私と同パターンじゃないか！なんかヒントがあるかもしれん。絶対読ませてもらおう！って考えていたからね。

「よ、読みたいです！その本読ませてください。」

私がものすごい勢いでそつこいつとアドルフくんは私に本を差し出した。

私は急ぎつつでも慎重に本を開く。

そこには見慣れた文字が並んでいた。

「これ日本語だ・・・。これ私の国の文字です！」

日本語の登場に感動して涙が出そうになる。少なくとも私以外にもここに来た人がいると思うとなんだか安心した。

「本当！？じゃあ読んでっ！早く」

感動していたせかされたので声に出して読み始める。

「えっと、『私がこの世界に来てもう2年は経つただひつ。今更だが記録をつける代わりに日記を書きたいと思つ。この世界に私が来たのはさつきも書いたように2年前だ。家でくつろいでいたらこっちに来ていたのだ。幸運にも村のすぐそばに落ちたので死なずにすんだ。だが、今でも、もし村の近くにある森に落ちていたら、と思うとゾッとする。私はやさしい村の人たちに拾つてもらつていま

もひつやつて生きている。本当に村の人たちにはよくしてもらっている。感謝してもしきれない位だ。早く恩を返せるようになりたいと思つ。』・・・・・ページ田はこれでお終いです。

読んでみて私とまったく同じだと思つ。私も本当に一瞬でひつて来てしまったのだ。おなじでホツとする反面2年も戻れてないと書いてあつたので落胆する。やっぱりすぐには帰れないらしい。

「そんなことが書いてあつたのか・・・。ねえ続きも読んでー！」

「アドルフは信じてるみたいだけだ俺はまだ信じてないからな。本当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だってあるんだ。」

「そういやまだ一人いたよーしかも一番手にわいのが。鬼畜男さーん！まだいますか！…もういいぢやないですか。せつかく信じてもらえる雰囲気だったのに台無しだよ。でも、この男のこつてることも一理ある。実際私が読めている保証などどこにも無いのだ。

「確かに私が読めている保証など無いです。でも本当に読めてます。信じてください」

私ができる」となんて信じてくれといつだけだ。あーあせめてあつんでききないよ。

「じゃあ書いてもらえばいいんじゃないかな？その本に載っている文字を。スラスラと書ければ彼女は本当にその文字を使っていたのだろう。今の短時間で覚えるのは無理だったろうし。」

そこでアネットさんが紙とペンを差し出す。

・・・ナイスアイデアー・アネットさんも「あなた最高です。本当にありがとうございました。」

私は受け取った紙にペンで『私は異世界から來ました』と書いてみた。

「書きました。どうでしょうか？信じていただけますか？」

もう本当にいい加減信じてほしい。そう思つていつもよりスラスラ書いてみました。

「・・・うん。字の形とか同じだね。なにより書きなれてる感じがあつた。デニーク兄さん、彼女は異世界から来てるよ。僕が保障する。」

アドルフくん！あなたも最高です！！

「……アドルフが言つたじや本当なんだろつな。普段こいつは  
口数が少ないがその分嘘をつかねーから。・・・・・・・・・・・・  
わあーつたよ信じるよお前の言つてよー。

うおー！感無量ですわたくし！とうとう全員が信じてくれました。長かった（？）戦いも終わりです。ありがとうございます鬼畜男！

「信じてくださいがどうぞ。」

「べ、別にお前のためじゃねえよつ……」

・・・・シノワレ。

序章4（後書き）

ビックリマークが多いですね。すみません文才がないから「いやつて」まかしてるんですけど（笑）読みにくかつたらこつてください。どうにかするので。

\* \* \* \* \*

読んでくださつての方ありがとうございます。次でこの過去の話しあは終わりになると思います。ああ、早く現在の話書きたい。

## 序章5（前書き）

泣きたいです。一回書いた原稿がきれいに消えました。  
やつぱー田に2回更新なんて無茶しよつとあるからですかね・・・。

消えちゃっただけどがんばります・・・。

よくやく3人に信じてもらひことができました。

だがしかし、私の危機的状況は何一つ変わっちゃいない。あ、いや命の危機は去つたから変わったっちゃ変わったがこの異世界でどう生活していくかが何も決まってない。

ちなみにいま、私の頭に浮かんでいる案はアネットさん達に住み込みで働くことができるところを紹介してもらひことだ。今のところこれ以外浮かばないのでこれでいくしかないだらう。早速聞いてみるか！

とそこまで考えて時に気づく。

「私名乗つてなくね？名前いってなかつたよ。一応言つた方がいいよね。」

「あの、今更なんですが今まで名乗らずにすみません。私の名前は海野翔子です。海野が名字で翔子が名前です。」

「名字！？お前貴族なのか？」

鬼畜男さんが言つ。え？貴族？つちはバリバリの一般庶民です。

「いえ、違います。貴族なんて身分じゃないです。いっその世界では名字があると貴族なんですか？」

「ああ、名字は貴族様しか持つことができないんだ。どこでもう一回名前いつてもりえるかい？聞き取れなくてさ。悪いね。」

「あ、いえ。翔子とここます。しょ・つ・！」

「シラウマーーハ?」

「いえ、しょ・つ・！」です。」

「シラーーハ?」

・・・・・・・・・ビーナスの私のはじめの世界では発音でき  
ないらしい。

「あ、じゃあシーツ呼べますかね？」

シーツてこつのは私のあだ名だ。海野の海から来ている。

海 = s e a = シーである。センスについては何もいわないのでくれ。  
考えた友達が不憫だ。彼女は3日3晩考えた末にこのあだ名にした  
のだ。

「シーカー?これなら問題ないね。」

よかつた。友達よ!こまこの前の努力が役に立ったぞ!—!

それでしまったが本題に戻ろう。

「アネッティさん、」のあたりで住み込みで働けるといひはあります  
んかね?私でもできそうなもので。」

「え?住み込みで働くのかい?・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
一個あつたね。住み込みで食費免除で休日もあるといひが。」

なにその好条件！？好条件過ぎて怖いくらいである。

「ドリですかそこー？教えてくだわー！」

アネットさんはこやつと笑つて言つた。

「うー、アネット食堂モー！」

こつして私はアネット食堂で働くことになった。

ちなみにこの後ドミニクさんの猛反対劇とかがあつたけど割愛。  
決してめんどくさいからじゃない。決して。

さらに私がお約束の、とくチートで魔力がいつぱいあつて制御に時  
間食つたとか、その制御法を教えてくれたのがドミニクさんで結果  
仲良くなつたとか、アドルフくんが天才過ぎて王都にあるこっちの  
世界で言う大学に飛び級で学費免除で行くことになつたとか、あつ  
たけどそれも割愛！

うん、結構大事なことだったね。割愛しちゃつたけど。

一応補足しておくといまや我とドミニクさんはめちゃくちゃ仲良し  
だ。私は何があったらまずドミニクさんを頼るねつてくらい仲良く

なれた。鬼畜界つて書ひたのが懐かしごくらじだ。

アドルフくんは王都に先月行つてしまつたが1週間おきに手紙が届くし、私とは念話という私オリジナルの魔法でほぼ毎日話しているので寂しくはない。

まあそんなこんなで海野翔子こと、シーは異世界ライフを堪能（？）しつつ元の世界に変える方法を探しています！

## 序章5（後書き）

おわった！過去編終わりました！！

データ消えた時は泣きたがりでしたが無事過去編終わりました。

これから現在が始まるので読んでくださいといつれしこです。

「今日はお疲れさん。夜は特に忙しかつただろう?大丈夫かい?」

仕事が終わつて夜、アネットさんが声をかけてくれる。

今日はアネットさんが言ったとおりものすごく忙しかつた。なんでも町の騎士団の給料日だつたらしくてみんな外食にしたらしい。食べ盛りの男共がわんさか来て疲れました。

私は厨房で働かせてもらつてるのでめんぢくさい騎士たちの相手をしなくてすむがフロアのほうで働いているマリーさんとフェイトさんは大変だつただろう。ああ、マリーさんとフェイトさんというのはアネット食堂の従業員さんのことです。お二人とも美人で優しい。お菓子をくれるいい人です。

そして騎士たちは隙あらばフロア担当のお2人を口説く。なんでも出会いが全然無いらしい。私もヘルプでそつちに出たときにもううんざりするくらいお世辞を言われた。アレは本当に鬱陶しかつたなあ。日本人は褒められ慣れてないんだよ。耐えている2人はすごいと本気で思う。

あ、ちなみにドミニクさんもこの騎士団で働いています。でも彼は実は彼女さんがいるので口説いたりしてませんよ。

そんで私はさつき書いたとおり厨房で働かせてもらつてます。元より一人暮らしだつたんで料理は得意だつたんです。さらに前作つみてといわれたので作つてみた私の世界の料理がアネットさんの舌

をつならせましてそれ以来店のメニューに入りました。よつて私は  
ロックさんです。1年前は女子高生だったのにな・・・。

今のところメニューに入ってるのはシチュー（ひょりと意外なこと  
にこつちにはシチューが無かつた。スープは普通にあるナビ。）と  
肉じゃがもどき、プリンもどきにアイスもどきである。  
なぜシチュー以外「もどき」が付くのかといつと地球とは食材が違  
うからである。

ジャガイモなんて無かつたのです。なので肉じゃがもどきにはジャ  
ガイモと食感はまったくおんなじなのに色が青色って言つなんかも  
のすごい野菜“ヒユーレ”を使ってます。なので肉ヒユーレになつ  
ちゃうのだ、本当は。

それはなんか嫌なのでそのままの名前でやつているけど時々みんな  
に「じゃがつて何?」って聞かれる。そのたびこまかしてるナビ。  
つつこんじやいけないことも世の中にはあるつてことです。

私的にはアネットさんの料理のほうがおいしんだけどねー。私の  
雑な料理より確実に。アネットさんの料理はマジ神です!どんなに  
お腹空いてなくとも食べれちゃうんだからもう魔法だよね。

あ、そういう魔法といえば私はもう一個お仕事します。チートな  
能力を使って魔法で便利屋さんを。

魔法がなければ解決でき無そなことを解決するのが仕事内容。  
小さな女の子から依頼で木のてっぺんに引っかかった帽子をとつて  
くれ、から騎士団の依頼で町に盗賊が来たので捕らえるのをつだ  
つてほしいなど、ものすごい幅の広い便利屋をやつてます。

これをはじめたのはせっかくあるチート能力を生かしたかったのと  
アネットさんにお世話になりっぱなしだったので食費ぐらい入れた  
いと思つてだ。はじめて半年たつが結構好評である。

「それでシー。あんた昨日や今日から戻りたいって言っていたけどつけたのかい？」

「アネッタさんと遊び話しかけられた。

「ほえ、田記……あー、忘れてた……」

「え、えへ、忘れてました。今から書いてきます！そのまま寝ちゃうかもしないんでおやすみ話つりますね。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。私ももう寝るかな。じゃあ田中もひくじへ頼むね。」

「はーい！」

階段を駆け上がりながら返事をする。

私の部屋は3階建てのアネッタさんの家の最上階、3階である。前はアドルフ君と相部屋だったけど今はアドルフくんがいなくなつたので一人で使っている。

んでその向かいにある部屋がドリーフさんの部屋。2階はロビングとアネッタさんの部屋がある。1階はもうひと部屋だ。

階段を上り終えて部屋のドアを開ける。

私は机の上にあったあるパンとノートを手に取った。

もう一年経っちゃったけど私は日記をつけることにした。もし私が  
たいな人がまた来た時の為にだ。私はあの異世界人の日記のおかげ  
で生きていくといつてもいいくらい日記に恩があるので私ももし役  
立つたらと思って書くことにした。

本当はもっと前からそう思っていたのだが、なかなか忙しく書き始められなかつたのだ。

「さて、タイトルは何にしよう?」

一人なのをいい事に独り言を言つてみる。だつてなんか喋つたほう  
が思いつきそうだったからね。

「うーん、どうせならそのタイトルだけで内容がわかるようにした  
いよなー。うーん・・・・・」

私は悩む。タイトルなんてそんなに大事じゃないんだがなんだかこ  
だわつてしまつ。

なんとなく私のシーとつあだ名に『3月3晩悩んだ友達の心がわか  
つた氣がした』

「うーむ・・・・よしつーこれにしよう。」

私は日記帳の表紙にでかでかと日本語でタイトルを書く

『異世界トリップ者の異世界奮闘日記』

「よしーあんだけ考えて結局なんのひねりも無こなじめしこう」  
「わて早速書くかな、中身。」

こんな風に日記を書き始めた頃の私は知る由も無かった。  
この平穏であたたかな日常に終わりが来ることを。

## 表紙～タイトル～（後書き）

すみません。サブタイトル変えることにしました。この話を表紙にして次から1ページにします。前の話は過去編1とかに変更します。急にすみませんでした。

その訪問者は本当に突然やつてきた。  
そして私の平穏な日常を崩していったのだ。

その日は私が日記を書き始めて10日くらい経った日だった。

「シーチャーん…今度俺とお茶しようよ。わたくしん俺のおじいさんですわ。

」

「おじいとか言つて後悔しても知りませんよ。私ものすいこ食べる  
からー。ハイツ！肉じゃが定食です。わかつちゅうと食べて仕事行  
かないと怒られますよ？」

「う、こんなときまで仕事の話は出さないでくれよ。食事の時まで  
あの地獄の訓練を思い出したくなー。」

そうこうして青ざめた唇の一人、騎士のロウツフと軽口をたたきつつ次  
の料理を運ぶ。

今日はフェイトさんが風邪を引いてしまったためお休みで私もフロ  
アのほうも手伝っているのだ。おかげで歯の浮くようなお世辞を言

われすぎてゲッソリです・・・。

このロウフにもお茶に誘われたがもちろん断りました。めんじくさいしね。まあロウフ相手だつたら気が楽そうだけど。こんな風に軽口たたけるし。にしても今日も騎士が多い日だなー。給料日はこの間あつたばっかなのに。もう忙しいんだよ騎士がいると。

そんな感じで忙しいけど和やかな雰囲気だつたのだ。

だが、次の瞬間この雰囲気がぶち壊しになる。

ガチャーン！－リリリリリリーノ

急にものすごい勢いで店のドアが開けられる。リリリリリリーノンはドアの上についているベルが鳴る音だ。地球上にもあつたけどこっちにあるなんて最初は驚いたものだ。普段普通に開けるときはリーン位しか鳴らないのに今のはものすごい鳴ったなオイ。つーかその扉は寿命が近づいて来てるから勢いよく開けられると壊れるかもなのよね。壊れたらどうしてくれんのよと思いつつと文句言つてやろうとしたの勢いよく開けた主を見てみた。

そこには童話に出てくる王子様たちも裸足で逃げ出すよつなめちゃくちゃ美形の王子様がいました。

私はそのイケメンぶりに睡然としつつもその王子様を観察する。

格好は王子というよりは騎士に近い感じの服装であった。帯剣しているし。ちゃんと防具つけているし。でもそこにいる唖然としていてアホ面のロウフとはまた違った感じである。なんか「ひめ」と高貴な感じ。王様に仕えていそうなイメージである。

この服装も十分すごいが顔がさらにすごかつた。いい意味で豪華な服装に負けないくらい、というか服装を見事に引き立て役にしているくらいのイケメンだ。髪の色は金髪で目は碧眼。あーのラインはスッとしていて鼻筋も通っている。町を歩いていたら10人中10人の女性全員が振り返りそうなくらいの美形だ。

はー・・・まさに王子だわー。とか考えながら声をかけてみる。

「いらっしゃいまーせー。お一人ですか？」

声を掛けられたことに気づいたのかその王子が振り返る。そして私を見て一瞬目を見開いた。

ん?なんか驚かれるような格好はしてないけどなー。

と思っていたが一つ私はこの世界の人と違うところがあつたのを思い出した。

あーのこと思われてるのか。なら先手を打つといつと思ふ声を出す。

「あの、驚かれているようですがもしかしたらこの黒い髪の毛と田のことですか?この2つは生まれつきなのでもし気分を害されたなら申し訳ありませんがほかのお店に・・・・・はー?」

私がセリフを中断したのには訳がある。なぜだか知らんが王子(仮)がいきなり私に跪いたからだ。

え？ なに？ 何やつてんのこの人？

周囲もいきなりの行動に唖然とする。

「あ、あの何やつてるんですか？ 顔上げてください。」

私がそういうと王子（仮）は顔を上げて言った。

「我らが巫女姫様みこひめひめさま、おかえりなさいませ。僭越ながらわたくしがお迎えにあがりました。さあ城に戻りましょう。」

・  
巫女？ 姫？ 何を言つてるんだ王子（仮）よ。

周囲の心が一つになつた瞬間である。

## 1ページ（後書き）

主人公は騎士たちの言葉をお世辞だと思つてますが実際、彼らは本気で言つてます。特にロウフは本気です（笑）

シーコと翔子の見た目は黒髪、黒目で髪は腰ぐらいまで伸びています。また身長は152cmとちょっと小さめですがスタイルもよく出るところ出でます　顔もかわいいです。

なのでモテるんですが気がつかない彼女・・・。

騎士たち、不憫！（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8852y/>

召還者の異世界奮闘日記

2011年12月1日15時30分発行